

Summary, 12/04/2024

2024（令和6）年12月4日

「写本から考える古英語語学研究 — Rushworth One エディション編纂とその後の展望」

発表者：小竹 直（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）

本発表では、発表者が2023年に出版した *Rushworth One: An Edition of Farman's Old English Interlinear Gloss to the Rushworth Gospels (Oxford, Bodleian Library, MS Auct. D. 2.19)* (Oxford: The Society for the Study of Medieval Languages and Literature) について、編纂の背景を紹介し、古英語作品のエディション編纂と言語研究の関連性について議論を深めた。

このエディションは、9世紀初頭にアイルランドで作成されたラテン語福音書写本である通称『ラシュワース福音書』（The Rushworth Gospels; the MacRegol Gospels の別名でも知られる）のテキスト行間に記された古英語訳のうち、Farman によって記された部分（Rushworth One）を、ラテン語と合わせて編纂し、イントロダクション・注釈・グロッサリー（語彙集）を付したものである。

発表では、『ラシュワース福音書』写本の来歴、ラテン語福音書テキストに関連した諸問題、古英語における行間訳という翻訳手法、および『ラシュワース福音書』の行間訳の出版史などを概観したのち、写本から校訂本を編纂する際の課題やその過程で得られた発見について具体例を示しながら議論を進めた。特に以下の3点に注目し、それらの意義を『ラシュワース福音書』行間訳の成立の背景と結び付けて検討した。

- ① 『ラシュワース福音書』写本のラテン語テキストと一致しない古英語行間訳とラテン語異読の関係性
- ② 『ラシュワース福音書』写本に加えられたラテン語の修正のうち、古英語行間訳からのback-translationが疑われるもの
- ③ 古英語行間訳におけるenlarged lettersの使用と典礼テキストの分割方法との関連性

①と②の調査には、上記エディションのcritical apparatusに反映されたラテン語福音書のテキスト比較が不可欠である一方、写本から行う調査の重要性については②や③の議論にて強調した。

また、写本研究と言語研究を組み合わせることで古・中英語の文献の理解をより深め、英語史教育への還元も視野にいたした今後の研究展望についても簡単に触れた。